

【暗唱聖句】

【今週のポイント】

【日曜日・家庭における機能不全】

創世記には家族間におけるトラブルが赤裸々に描かれています。信仰の父アブラハムは、サラになかなか赤ちゃんが与えられないので、召使のハガルに子どもを産ませます。それによりサラとハガルの間に不和が生じ、やがてイサクが生まれたことによって、さらに家族の関係は悪化します。そのイサクは双子の兄弟の兄エサウを愛し、妻のリベカはヤコブを愛しました。またヤコブは嘘をついて長子の特権を奪い取ったことからエサウに命を狙われるほど関係は悪化し、家を出なければならなくなります。そのヤコブはさらに、兄エサウとの問題だけでなく、4人の妻と男だけで12人の息子たちの問題で心休まる暇もないほどでした。信仰の父アブラハムから3代にわたって見てきただけでも、絵に描いたような平和なクリスチャン家庭などではなく、常に混乱と信仰の戦いの連続でした。しかし、このような混乱した家族であるにも関わらず、ヘブライ人への手紙11:17~22にかけて、彼らの信仰を讃えています。彼らの姿は神様の期待を下回るものだったことなのでしょう。しかし、それぞれ弱さを自覚し、それゆえの信仰の戦いを通して多くのことを学び、成長していきました。その点が重要なこととして取り上げられているのです。私たちも同様です。もし、家庭内に問題があったとしても、それで自分を責めるのではなく、その中でも神様は生きて働かれ、私たちの信仰を育てていかれようとしておられます。家庭問題ほど、私たちを神様に向かわせるものはないのです。

【月曜日・新しい方向を選ぶ】

父ヤコブから甘やかされて育ったヨセフは、エジプトに売られていくとき、全く備えができていないことに気づかされます。一人ぼっちで、異国の地で、しかも奴隷として生きて行くことができるのだろうか。平和と安らぎが奪い取られようとしている中で、ヨセフの転機が訪れます。ヨセフは、父から何度も耳にした尊い教訓を、まざまざと思い出します。そして、神様が父ヤコブを守ってくださったように、自分のことも共にいて守り導いて下さるように祈り、その場で自分を全く主にささげる決心をします。彼はどのような環境のもとにあっても、天の王の臣民らしく行動し、神様に忠誠を尽くそうと決心するのです。そのときでした。彼は心に大きな感動をおぼえ、不安と恐れは消え、安らぎに変わって行くのを感じました。彼の心にもはや迷いはありませんでした。この一日の経験が、ヨセフの生涯の分岐点になっていくのです。この恐ろしい不幸が、あまやかされた少年から、思慮深く、勇敢で沈着な大人へと変えていくのです。

信仰は他者からの影響を受けますが、最後はやはりわたしと神様との関係となります。親がどれほど立派な信仰者でも、子どもも同じような信仰に至るとは限らないのです。歴代誌上16:11に「主を、主の御力を尋ね求め、常に御顔を求めよ」とあるように、個人的に神様を求めて行かなければなりません。そのためにヨセフは父の保護を外れ、一人にさせられたともいえるのではないのでしょうか。ヨセフは父親から甘やかされて育ちました。その結果、うぬぼれが強くなり、兄たちからは憎まれることとなりました。エジプトの宮廷役人ポティファルに売られたヨセフは、父のもとで受けた信仰を、一人で育てて行かなければなりませんでした。しかし、それが大切だったのです。

【火曜日・真の自尊心を見出す】

力強く、生き生きと生きて行くために自尊心は大切です。しかし、高慢でうぬぼれの強い自尊心はかえってマイナスとなります。ヨセフはすべてが奪い取られ、ゼロの状態にさせられました。そして、人からの評価ではなく、神様からどのように見られているのかだけに価値を見出すようになっていきました。これは人の目を気にしないで、生きて行くために大切なポイントです。では、神様はわたしたち一人ひとりをどのようにご覧になっているのでしょうか。

マラキ 3:17 わたしが備えているその日に、彼らはわたしにとって宝となる

ヨハネ 1:12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

聖書は、私たちは神の子であり、神様にとって宝であると書かれてあります。条件は、ただ神様を信じ、受け入れるだけです。私たちが立派であろうとなかろうと、関係がありません。神の子として見られていることを知るとき、この世の評価はかすんで行きます

【水曜日・神の関係づくり】

ヨセフは奴隷として売られていったにもかかわらず、主人から信頼され、全財産を管理させるほどでした。そのため最初のうちは、想像以上に良い暮らしができたと思われます。これも神様に従って行く決心をしたからだと思つたに違いありません。ところが、試練がやって来ようとしていました。ヨセフの決心が本物かどうかを試されようとしていたのです。何と、主人の妻がヨセフを誘惑してきたのです。もちろん、その誘惑をヨセフはうまくかわすのですが、誘惑は何度も続きました。私たちは、誘惑を一度はねのけることができても、何度も続くと、負けてしまう場合があります。心の中では激しい戦いが繰り広げられています。ヨセフがポティファルの妻から誘惑を受けたとき、こう言いました。

「わたしは、どうしてそのように大きな悪を働いて、神に罪を犯すことができましょう。」創世記 39:9

罪は神様を悲しませ、神様から離れて行く行為です。ヨセフはエジプトの地で何があっても神様を選ぶと決心し、大きな感動と平安を得たのです。いま、それが脅かされています。この誘惑を拒絶することによって、自分の立場が悪くなることも考えられました。しかし、ヨセフは神様を選んだのです。神様の関係を強めたいと願うとき、神様はあえてこのような試練や誘惑を許されることがあるのかもしれませんが、ヨセフが誘惑に勝利したとき、結果的に牢屋に入れられるはめになるのですが、心の中は平安でした。

【木曜日・身近にある大争闘】

ポティファルの妻の誘惑を拒絶することによって、ヨセフは牢屋に入れられることとなります。しかも、ヨセフがポティファルの妻を誘惑したとの汚名を着せられて。真実は神様をご存じです。ヨセフにとってそれで十分でした。牢屋の中にあっても、神様はヨセフと共におられました。これが何よりの救いでした。牢屋の中で、主は恵みを施し、ヨセフが監守長の目にかなうように導かれたので、「監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のはすべはすべてヨセフが取りしきるようになりました」(創世記 39:21、22)。ポティファルの家から離れても同様に、ヨセフは信頼を勝ち取ります。ヨセフの誠実な人柄もちろんあったことと思いますが、それと共に主が導かれたと書かれてあります。神様は目には見えませんが、このように働いて、この地上での人間関係を導かれているのです。

ヨセフは獄中にあっても、それも神様のご計画の一部でした。私たちはすべてのことを知らされるわけではありません。だから、信じるしかありません。辛い出来事さえも、神様のご計画の中にあるのだと。すると、やがて道は開かれていきます。王のもとで料理長と給仕長をしていた2人の人物が、ある日夢を見ます。その夢の意味をヨセフが解き明かすことによって、何と奴隷として売られたイスラエル人のヨセフが、エジプトの王に次ぐ地位を得る第一歩となって行くのです。

私達の身近には常に誘惑と戦いがあります。神様を第一としていくとき、八方ふさがりのように思える状況さえ、神様の御心だったのだと思えるように展開していきます。まさに、それは奇跡です。しかし、神様のご計画の中で、起こるべくして起こっているのです。